



周作クラブ会報

(第81号)
2020年11月15日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

20周年記念企画
会報71から80号までの記録 1頁3面
総会報告 1頁3面
周作クラブ長崎便り 6頁4面
長崎文学館便り 7頁4面
連載・樹座30年⑦ 8頁4面
連載・エッセイ 9頁8面
私が選ぶ遠藤周作の作 11頁10面
お知らせ欄 11頁9面

「影に対して」と父、そして人生

遠藤龍之介氏（フジテレビ社長）に聞く

周作クラブ20周年記念 特別インタビュー

——周作クラブ20周年・特別インタビューのために時間を割いていただき、ありがとうございます。まず、話題の未発表小説『影に対して』についてですが、発見された後いち早くお読みいただいた、その感想から伺います。

遠藤 「影」というのは多分、自分を取り巻くもの——両親や家族も含んでいます。まあ親のことだと思えます。書かれたのはおそらく『沈黙』の発表の後、昭和40年代半ばかもしれません。当時、私

の父方の祖父母と父とは疎遠で、私も母も祖父母との交際はほとんどありません。父が遠ざけていたという感じですが、そこにはやはりいろいろな思いがあつたんだと、今回読んで分りました。それにしても、この小説をなぜ発表しなかったのか。やっぱり、登場人物が非常にリアルですね。だから私小説として受け取られる可能性もあるのですが、当時の父としては気持の整理が充分につかなかった、それで公にすることを逡巡したのかもしれない。この小説が発見されたと文学館や加藤さんから教えていただいて、読んで、果たしてこれを公にするべきかどうかと、じつは結構悩みました。

——やはりそうでしたか。

遠藤 当時の父が「世の中に出すべきではない」と考えたのでしようから、それをどうしたらいいか、と悩んだのは事実です。ただ、悩んだ末にたどりついた結論は、小説家は一度原稿にしたものをいっつかは世の中に出すべきなんだろうということ。しかしこれは私の勝手な判断で、父が聞けば勝手なことするなど怒

鳴られてしまうかもしれません。——遠藤先生はご両親について、家では何かお話しになりましたか。

遠藤 わが家で祖父の話はタブーになっていました。私もそういう雰囲気を感じ取っていたから、父には怖くて聞けない。それで母に聞いたことはあります。祖父は固い商売だったので、父が作家になることに賛同しなかった、それがひとつ。それから当時でも保守的な人だったので私の母にたいする気遣いもあまりなかった——そういうことが重なったんだろうと思います。ただ、最大の理由は、父が敬愛していた遠藤郁という母の夫でありながら、後妻をもらったこと（これはしょうがないことですが）にも抵抗があつたと思います。しかしそのことを父に聞くのは避けなければいけないと、子供心に思っていたんです。

祖父のことももう一つ思い出するのは、1980年の初めぐらいです。祖父はもう身体も衰えて、柿生の病院の6人部屋に入院していました。そこを父と一緒に見舞つたことがあるんですね。大部屋に入っていくと独特の老人臭が鼻をついて、もう枯れ木のような老人がベッドに寝ている。その中に祖父を認めて、父は手を握っていました。そして一言か二言、言葉をかかわしているのを遠くから私は見ていた。病院を出たあと蕎麦屋に行きましたが、父と祖父のことを聞くのは憚られたので、わりと言葉少なです。すると父親がぼそっと「もういいのかもしれないねえ」と言っただけですね。それにはいろんなことが含まれていたと思います。彼が人として生きてるのはもういいのかもしれない、という意味もあるし、もしかしたら長年あつた「心の距離」はもういい

のかもしれない。深く訊くのも憚られて、「ああそうですか」と終った覚えがあります。もしかしたらそれが父にとって、遠藤常久という父親と和解した日なのかもしれない。

——そういえば龍之介さんは小学生の頃から、お父様と話すのもずっと敬語でしたね。

遠藤 普通は、母親が子供と父親の間に入ったりとか、子供の味方をしたりしますが、私の母は常に「父寄り」でしたからね。だから他の家庭で母親が子供を猫可愛がりするのを見ると、うちは優先順位が違う、と思いました。まあそんなことはないんですけど、父が一番、私はその次、と子供のときは思っていました。

人生を歩く——アスファルトと砂浜

——小説の最後のほうに母親の手紙が出てきます。その中に「アスファルトの道は安全で歩き易いが、振り返ると足跡は残っていない。砂浜は歩きにくいけれども足跡が残る」とあつて、「母さんはそんな人生を選びました」と書かれています。確か、龍之介さんも遠藤先生から同じことを言われたと。

遠藤 そうです。父親もうまいこというなどあの時は思っただけですけどね。父親の書齋に行つて「フジテレビに決まりました。ご心配かけました。ありがとうございます」と言ったら、その話を始めたんです。ちょっと脚色もあつて「実は先週な、母さんと江の島に行つたら、海岸のレストランがとつてあつて」といかに最近のストーリーのようにして砂浜の話。……でもバクリだったということが今度わかつて(笑)。